Lecture・座学講座

「細部を象る」美学
― ケルトと日本の「生命デザイン」

鶴岡真弓
多摩美術大学・芸術人類学研究所・所長／ケルト芸術研究家

「ユーラシア世界」の「東西のきわみ」にある「日本とケルト」。
先史以来の篤い自然信仰を、細部に象り、
渦巻く生命のデザインを育んできた、ふたつの文明の共振を解き明かす。

ヨーロッパの基層、ケルト文明へ

「ケルト」とはヨーロッパの基層にあった古い文明です。今から二千七百年前、アルプス以北のヨーロッパ各地にケルト語を話す文化集団がおりました。世界遺産「ハルシュタット」(オーストリアのザルツブルクの南東)の湖のほとりの塩山で、ケルト人は塩を採掘し、「バルト海の琥珀」と「地中海のワイン」を「ケルトの塩」と交換する交易をしていました。古代において塩は、ビタミン源である猪ないし豚の肉を保存するために不可欠の、白いダイヤと言われるほど貴重でした。

いっぽう、このハルシュタットの遺跡と出土物は、ケルト人が紀元前 800 年には高度な「鉄器文化」を築いて、東西に拡大していった跡を示しています。お馴染の「アーサー王」のエクスカリバーなどの剣は、ケルトの鉄器文化が先端的であったことを伝えるシンボルと言えます。

そうしたケルト文化の広がりは、西はポルトガルの「コインブラ(高城)」や、東はトルコのアンカラ近傍の「ドルネメトン(樫の木の聖所)」などにも、ケルト語の地名によって示されています。東はトルコから西はアイルランド、北はユトランド半島、デンマーク、南はローマやもっと南まで、ケルト文化の痕跡があるのです。

驚くべきはヨーロッパで最も重要な山脈「アルプス」も、「ドナウ」や「ライン」や「セーヌ」という主要河川名もすべてケルト語源です。みなさんがペットボトルで飲む「アルプスの水」を最初に飲んだのはケルト人であったと言えるかも知れません。これらは彼らにとって聖なる山であり水界だったのです。

そしてケルト人は紀元前 400 年ごろには北イタリアにまで侵入して、エトルリア人と交易もしました。後世、北イタリアのミラノがしばしばフランス(ケルト＝ガリア人の国)に侵入される理由もそこに遡るのです。ラテン語でアルプスの北側は、ローマ人から見ると北方で野蛮なケルトがいる「トランス・アルピーノ(アルプスの向こう側)」、いっぽうローマ人のいるアルプスの南側は「シス・アルピーノ(アルプスのこちら側)」と呼ばれた。ローマの将軍カエサルが紀元前 51 年に今のフランス「ガリア」を完全に平定し、ローマの支配下におきますが、アルプスの北には、ローマが来る以前に長い間そうした豊かな「ケルト文明」があったのです。

ケルト文様とユーラシアン・コネクションのデザイン

アイルランド共和国の首都ダブリンに行くと、羊皮紙に描かれた「ダロウの書」という福音書写本があり、典型的な「ケルト渦巻文様」が装飾されています。肉眼では追い切れない驚くほどミクロな細部が描き出されているのが、ケルト文様芸術の特徴です。

ダブリン大学トリニティ・カレッジ図書館の至宝『ダロウの書』(680 年ごろ)と『ケルズの書』(800 年ごろ)は、ロンドンの大英図書館の『リンデスファーン福音書』(680 年ごろ)とともに、ケルトの三大装飾写本として有名です。信仰の徒でデザイナーだった修道士たちが、フリーハンドで描いたもので、中世ケルト美術の傑作です。

ケルト美術は驚異的なミクロのスケールで生命的な「うごめき」を描き出します。シベリアやアイヌのシャーマンたちの文様にも同じような渦巻きや S 字曲線が見られます。私はそれは偶然同じようなもの、ではなく、先史からのデザインのユーラシアン・コネクションの結果であると思うのです。

ご存知のように、地球上で一番大きな大陸はユーラシア大陸です。それは大陸や島に分かれる前のパンゲア＝汎大陸の記憶を残している。日本列島は大陸ではないけれど、「ユーラシア世界」の一員なのです。これは私にとって地理上の発見でしたが、ユーラシア世界の最東端部に我々の日本列島があるわけです。

私はそうした「ユーラシアン・コネクション」から文明論的に見えてくる、生命のデザインや文様を追っています。「西のきわみ 1ーケルト」と、「東のきわみ＝日本」。日本のことを極東(ファーイースト)とする呼び方もありますが「東のきわみ」と捉えたい。そう思えるようになったのは「西の"きわみ"」である「ケルト芸術と文化」が教えてくれたのでした。そして、そこども繋がる大切な生命的デザインがユーラシア世界には連綿とある。それを教えてくれたのが、ケルトの三大写本だったのです。

ケルト文化を作った四つの季節暦

また驚くべきことに時空を超えて、じつはケルトの季節暦はいまや現代の世界に広まっています。ケルトのお正月は十一月一日、春の祭は二月一日、夏の祭が五月一日(メイデイ)、秋の祭八月一日が秋の収穫祭です。今のヨーロッパの季節暦では十一月一日はサウィン(ケルト語で十一月の意、英語ではハロウィン)、二月はインボルグ、五月がヴェルティネ、八月はルナサと呼ばれます。今でもヨーロッパの人々はこの暦にしたがって、冬に耐え、春を待ち焦がれ、夏を祝い、秋の収穫を迎えています。なかでも大切なのは五月一日の「メイデイ」と十一月一日の「ハロウィン」です。

ケルトの神話では、五月一日のメイデイの前夜に王子が馬小屋で生まれる。キリスト、聖徳太子の生誕も馬小屋ですね。ケルト、インド、ヨーロッパ、日本まで、この神話のユーラシアン・コネクションにおいて同じような神話で繋がっている。拙著『黄金と生命』(講談社)でも書きましたが、馬は太陽の化身であり、天上の太陽と地上の黄金は対応しているのです。黄金＝金属は人間に力と美を与えてきました。

太陽の化身としての馬＝王となるプリンスが馬小屋で生まれる。ケルトから日本まで、「西のきわみ」から「東のきわみ」まで、一本に貫かれているウマと太陽の黄金のシンボリズムであり、神話です。

それに関係して、あのマイケル・ジャクソンがスターになったのは、死者が地面から次々と出てきて踊るビデオクリップ「スリラー」ですが、あの演出は、十一月一日の前夜のケルトの季節祭サウィンに関係があると私は思っています。マイケルという名前自体、「死の大天使ミカエル」なのですが、大ヒットしたのはアメリカ人、ヨーロッパ人なら誰でもが知っている、ハロウィンの死者の蘇り、墓から地面から死者がグーッとのし上がってきて、その中心でマイケルが踊っている演出が受けたのでしょう。

ケルトに伝わる四つの季節のうち最大のものが、ハロウィンで、死んだ祖霊が肉体を持って一年に一度の現れる夜です。そして生者はその日から食料がもっとも枯渇する真冬を生き抜いてゆく力を得ます。真冬の厳しさは生者の力ではなく、死者たちの霊的な力によって励まされ、暗黒の季節を逼進してゆけるのです。それを最初に感じる日がハロウィンの祭なのです。だからその日には、皆が「亡霊」のかっこうをしてその霊力にあやかるのです。

死者が年に一度、生き返りパワーをもたらす日「ハロウィン」は、死から生へ、古い年から新しい年への"反転(渦巻・スパイラル)"の運動なのです。つまり、車輪や太陽は転じることによって、表が裏に、上が下に、男が女に、暗いものが明るいものに、スイートがビターに、堅いものが柔らかいものに、絶望が希望に、収縮が膨張に、というように「反転」が「変容」と「再生」を生み出していくわけです。

生命のエネルギーを印すスパイラルの文様

つまり今日の話で一番申し上げたいことは、この「反転」というキーワードです。私たちの身体の細胞の一個一個が何によって生命たり得ているのか。それは、太陽のような車輪のような回転と同時に「反転」によってであるということなのです。

私たちはよく「生まれて、死ぬ」と言いますが、じつはこれは正しい言い方ではないと思います。「ケルト渦巻文様」の思想では、「死はあらかじめ生に含まれ」ています。「生はあらかじめ死を含んで生まれてくる」のです。死を抱えて生まれてこない生はない。私たちが毎日生き抜いているとは、死を含んだ生をそのつど「引き受けて」、「刻々と再生し続けている」ということだと思います。

つまり、生命は直線ではなく、放物線であり、S 字曲線であり、上から見るとスパイラルです。そしてそれはアイルランドの詩人イェィツが言ったように「反転」というキーワードによって名指すことができる。ケルトの渦巻文様は、死から生へ、再生する、反転するエネルギーをどれだけかたちで表せるかに挑んでいるようなアート&デザインなのです。

「ケルト渦巻文様」には特徴があって、遠心力で外に出てゆく渦巻が彗星の尾のような「トランペット・パターン」によって求心力を同時に起こすという驚くべき反転の動きをします。ケルト渦巻はい

わゆる単純なコイル状ではなく、このトランペット・パターンが、ハロウィンのパワーのように反転を繰り返す。死者が一瞬で蘇るような、古い時が新しい時に生まれ変わるような転じ方を、驚異のミクロコスモスのスケールで表現しているのです。

「Becoming=成りつつある」ものを見つめる

最後のキーワードとして、Being と Becoming を挙げましょう。Being とは(ある状態に既に)成ったもの」、Become とは「成りつつあるもの」。私たちは「成ったもの」だけについて語りがちですが、これからは「成りつつあるもの=変化しつづけるもの」を見つめるまなざしをもつことが大切である、そのことをケルトの渦巻構造は教えてくれています。

私たち人間も物も、実際は細胞レベルではつねに「Becoming=成りつつある」、「生命の過程」にある。ケルト文様がそうした特徴をとくにもっているということは、ヨーロッパの学者も強調しています。

ユーラシア大陸の最東端で研究している私が、最西端部のアイルランドで「ケルト文様」という「生命のデザイン」に出会いました。「西のきわみ」で研究し、逆に「東のきわみ」の日本が重要な場所を地理上に占めていることを教えられたのです。ケルトのこういった生命的な文様は、日本の歌や文様や装飾的デザインにも響き合っています。

『地球交響曲第一番』という映画では歌姫のエンヤと共演もしました。まさにエンヤさんは私が『ケルト/装飾的思考』(筑摩書房)を出版した 1989 年前後に英国 BBC が制作した「ザ・ケルツ(ケルト人)」という番組で、「ケルト的」で神秘的なサウンドを世界にヒットさせました。

出会いは偶然ではなく、十九世紀末以来の大いなる「ケルト文化のリヴァイヴァル」の始まりでした。「癒し」や「懐かしさ」といわれる彼女の歌には渦巻くような「生命的デザイン」を認めることができるのです。

鶴岡真弓(つるおか まゆみ)
多摩美術大学芸術学科教授・芸術人類学研究所所長。日本におけるケルト芸術文明研究の第一人者。ドキュメンタリー映画『地球交響曲第一番』(龍村仁監督)でエンヤと共演。主著に『ケルト/装飾的思考』(ちくま学芸文庫)、『ケルトの歴史』(河出書房新社)、『装飾する魂』(平凡社)、『阿修羅のシュエリー』(イースト・プレス)、『ヨーロッパの装飾文様』（東京美術）など多数。